

## 単位互換制度にみる学生の学習に対する意識

細川 和仁・銭谷 秋生・横溝 眞理

### Students' Attitude toward Credit Transfer System and Learning in Higher Education

Kazuhiro HOSOKAWA, Akio ZENIYA, Makoto YOKOMIZO

#### 1. 問題

##### (1) 単位互換制度の現状

本稿では、学生が所属する大学等以外の場における学習を、自大学等の授業を履修した単位としてみなす「単位互換制度」について考える。

単位互換制度は、1972年の大学設置基準の改正によって整備されたものである。大学進学率（短期大学を含む）が初めて15%を超えたのが1963年、そのわずか10年後に30%を超える値になったという状況を考えれば、急激に高等教育へのニーズが高まっていく中で、大学間の移動、あるいは海外の大学への留学なども含めた学生の移動に光が当てられていたことが推察される。

濱中（2004）によれば、1972年の大学設置基準の改訂の趣旨は、「所定の条件の下に学生が国内および国外の他大学においても授業を受け、単位を修得できるようにすることにより、国の内外にわたる大学間の交流と協力を促進し、大学教育の充実に資するよう所要の措置を講じたもの」であるとされている。

現在実施されている単位互換の取り組みとして、高等教育機関の共同体（大学コンソーシアム）の単位互換事業が挙げられる。例えば、大学コンソーシアムにおいて最も多様な活動が展開されている大学コンソーシアム京都では、単位互換制度について「学生の探究心と幅広い知識の修得につながるため、人文・社会・自然など興味に応じて履修できるよう広く科目を提供しています」と説明されている（ウェブサイトより）。学生が単位互換制度を利用することによって、「探究心と幅広い知識の修得」を目指し、所属する大学だけで

は得られない知的体験ができるようになっている。秋田県においても、平成17年に大学コンソーシアムあきたが設置され、県内の大学、短期大学、高等専門学校、職業大学校が参加している。そのうちの12機関が単位互換の協定を結び、相互に学生が行き来できるような制度を整備している。

また現在、大学における単位互換として焦点が当てられているのは、海外の大学との単位互換である。文部科学省による「大学における教育内容等の改革状況について」の調査によれば（平成26年11月14日公表資料）、国外の大学等と交流協定に基づいた単位互換制度を実施している大学は、平成24年度では、国立69校、公立38校、私立249校となっている。また、ダブルディグリーを導入している大学は、全体の18%となっており、少しずつ広がりを見せている。

##### (2) 単位互換制度の利用状況

濱中（2004）は、1学年に在籍する学生の中で、単位互換制度を利用して他大学の単位修得が認められた学生の割合（流動化率）を、質問紙調査から2.9%と割り出している。これには海外の大学での単位修得も含まれており、全体の17%を占めている。その他、国内の大学51%、放送大学28%などとなっている。この調査が行われてから10年以上が経過しているものの、「2.9%」という値をどのように見ればよいだろうか。

大学コンソーシアムあきたにおいては、単位互換制度の活用が活発だとは言えない状況にある。大学コンソーシアムあきたの報告書によれば、履修登録者の延べ人数は図1の通りとなっている。実人員は最も多かった平成17年度で27名、平成

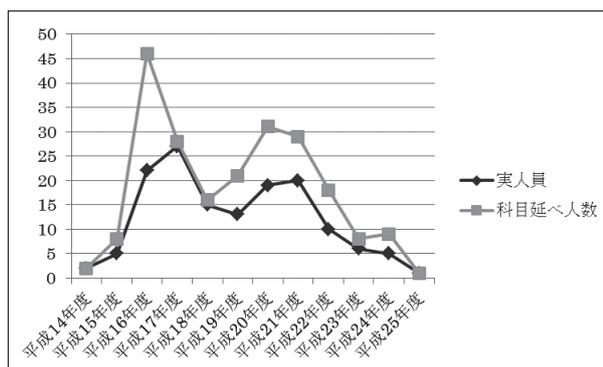


図1 大学コンソーシアムあきたにおける単位互換利用学生数 (平成25年度報告書より作成)

21年度に20名となってからは減少が続いており、平成25年度にはわずか1名となっている。

このように単位互換制度があまり利用されない要因として考えられることは、例えばつぎのようなものである。

- ① 学生の学習意欲……他機関に出向いてまで学ぼうとする意欲がない。
- ② 学生の多忙感……他機関に出向いてまで学ぶ時間的、精神的余裕がない。
- ③ 移動の困難さ……機関間が離れており、他機関に出向くための交通手段がない。
- ④ 学生への周知の不徹底……そもそも単位互換制度について学生が十分理解していない。
- ⑤ カリキュラムの自由度の低さ……学生自身が科目選択できる幅が狭くなっている。

これらの要因は試みに想定したものであるが、いくつかの要因が複合的にからみあっているのか

もしれないし、またこの他にも要因があるのかもしれない。まず、要因①のように、学生の学習意欲に原因を求めるのはある意味わかりやすい。数十年前に大学の授業を経験した人からは、「かつての学生は興味のある授業を受けるために、他大学へ『もぐり』(正規の学生ではないが、教員の許可を得て授業を受講する)をしにいった」といったエピソードが語られることがあるが、そのような事例はごく限られているとみて良い。つまり、以前の学生と比較して最近の学生は学ぶ意欲に欠けている、と単純には言えない。よって、単位互換の利用者の減少には要因①の学習意欲の問題も関係はあるかもしれないが、むしろ要因②のような、学習意欲に影響を及ぼす時間的、精神的余裕のなさが影響しているのかもしれない。

ベネッセが2012年に実施した「第2回大学生の学習・生活実態調査」によれば、平素の1週間においてどのような時間の使い方をしたかという問いに対して、各項目ごとの回答傾向は表1の通りとなっている。この結果から、友だちづきあいやサークル・部活動に費やす時間がある程度あり、それにも増してインターネットやSNSに関わっている時間が長いことが示唆される。印象としては余裕のある生活をしているとも受け取れるが、実際はアルバイトの時間も長く、大学の授業以外の「自主的な勉強」は6割近くが1週間のうち1時間未満である。少なくとも「自主的な勉強」にはあまり意識が向いていないと言える。

表1 大学生のふだんの時間の過ごし方 (1週間の時間) (単位：%)

(ベネッセ教育総合研究所「第2回大学生の学習・生活実態調査報告書」より作成)

	0時間	1時間未満	1～2時間	3～5時間	6～10時間	11～15時間	16～20時間	21時間以上
大学の授業などへの出席				15.0	13.5	14.5	18.2	26.7
授業の予復習や課題をやる時間	18.7	24.2	23.6	20.0				
大学の授業以外の自主的な勉強	31.0	27.7	17.8	11.6				
友だちづきあい		17.4	22.7	26.2	15.4			
サークルや部活動		16.5	21.0	24.1	15.5			
アルバイト				19.6	25.2	21.1	13.1	
社会活動(ボランティア、NPO活動などを含む)	81.2							
読書(マンガ、雑誌を除く)	28.3	29.8	20.3	13.5				
テレビやDVDなどの視聴		13.4	18.8	22.3	17.3			
インターネットやSNS			15.2	24.1	20.1	10.6		14.6

※網掛けをした数値は20%以上、網掛けのない数値は10%以上20%未満、10%未満は空欄とした

ではその他の要因に関してはどうか。要因③の機関間の移動の困難さも学習意欲に影響を及ぼしていることは十分考えられる。この地理的な要因を解決するためには、ICTを活用したネットワークシステムの構築や、駅前の利便性の高い場所に拠点を置くことなどが考えられ、既に実行されている。

また要因④の学生への周知に関しては、学生にダイレクトに情報提供するなど改善の余地はまだあるのかもしれないが、周知方法の変化によって劇的に利用状況が変わるとは考えにくい。むしろ、学生への周知には教員の影響が大きく、教員が他機関での学習を推奨するような指導や雰囲気があれば、学生の意欲も高まると考えられる。

### (3) カリキュラムの「自由度」

5つめの要因は、カリキュラムの「自由度」が小さいという点である。本稿では、単位互換制度を学生の立場から捉えなおし、自らが所属する大学等以外の場において学習することはどのような意味を持つのかをあらためて考えてみる。

所属する大学等以外の場で学ぶということは、学生自身の学習意欲が関わってくる。自分が学びたいことは何なのかを明確に理解し、その学習に一生懸命取り組む。もし所属する大学等において、それが十分できないとなれば、学ぶ場を自ら外部へと求めていく。そのような探究心を持った学習者像が学生に期待されている。

しかし、そのような外部での学習は、実質的に可能なのだろうか。学生にとってのカリキュラムは、選択の余地が残されているだろうか。もし選択の幅が狭められていれば、他機関の授業を履修するということが想像することすらできないのではなかろうか。そういった教育システム、学習環境も、学生の学習状況に大きな影響を及ぼしていると考えられる。

### (4) 本研究の目的

そこで本稿では、学生がカリキュラムというものに対してどのようなイメージを持っているかを明らかにし、単位互換制度のような外部での学習に対してどのような意識を持っているかを、質問紙調査の結果から探っていく。

## 2. 方法

### (1) 調査対象

この調査は、平成25年度に大学コンソーシアムあきたが公募した「学際的研究プロジェクト」に、本稿の執筆者3名がエントリーし、採択された研究課題「参加大学間の単位互換制度の活性化の方途を探る」の一環として行われたものである。調査に回答してもらう学生は、1年次ではまだカリキュラムに関する全体的な認識を持っていないことが予想されることから、2年次の学生を対象とすることとした。四年制大学、短期大学は2年次、高等専門学校では5年生に回答してもらうよう協力を依頼した。実際に回収した調査票の中には2年次以外の学生の回答もあったが、本稿では2年次学生の回答に限定して分析対象とする。

学校ごとの回答数等については、四年制大学が4校から541件の回答があり（内訳は、A校227件、B校148件、C校77件、D校89件、計541件）、短大及び高専が6校から476件（内訳は、E校173件、F校29件、G校38件、H校115件、I校77件、J校44件）の回答を得られた。

### (2) 質問項目

本研究プロジェクトの主な目的は、大学コンソーシアムにおける単位互換制度を活性化するためにどのような課題があるのかを明らかにすることであった。そのため、学生への質問項目は次のような内容で構成することとした。

- ① 学生の通学時間ならびに交通手段
- ② 時間割作成の自由度とそれに対する学生の意識
- ③ 専門分野以外の学習や、他校の学生との共同ゼミナールの実施についての学生の意識や意欲
- ④ 現行の単位互換制度の認知度
- ⑤ 現行の単位互換制度の利用度
- ⑥ 現行の単位互換制度を利用している理由と利用していない理由
- ⑦ 単位互換制度の今後のあり方についての希望（自由記述を含む）

本稿ではこのうち質問②③⑥の結果を中心に紹介し、考察を進めることとする。

### 3. 結果と考察

#### (1) カリキュラムの自由度に対する学生の意識

まず、カリキュラムの自由度に対する学生の意識について整理する。質問では「あなたの学校では、受講する授業科目を決める際に、あなた自身が選択できる自由度はどれくらいありますか」と問い、カリキュラムに対して自由度がない（つまり、ほぼ必修）状態を表す「0%」から、自律的にカリキュラム全体を組み立てることができる（科目を選択できる）状態を表す「100%」のスケールを設定し、調査票上に記された線分の上に、印をつけるという形式で回答してもらった。その回答をデータ入力者が読み取り、数値化した。結果は表2の通り

である。

この問いに対する回答者全体の平均は45.3%であった。受講する授業科目を決定する際に、学生自身が選択できる自由度は半分よりもやや少ない、といった状況が表れている。

これを回答者の機関別にみると、四年制大学はばらつきが大きく、D校は22.9%と全体で最も低く、C校は平均値が最も高い77.5%であった。一方、四年制大学以外の6校は26～56%の間に位置づけられた。学校によって、あるいはコースによってカリキュラムの自由度に対する意識は、かなりばらつきがあると言えるだろう。

表2では回答の0～100%の値を20%ごとに5

表2 授業科目を決める際に学生自身が選択できる自由度（平均値と割合）

学校 (N)	平均値 (%)	0～19%	20～39%	40～59%	60～79%	80～100%	全体 (%)
A (227)	50.6	3.1%	25.1%	32.2%	25.6%	14.1%	100.0
B (148)	49.8	2.7%	17.6%	45.9%	26.4%	7.4%	100.0
C (77)	77.5	0.0%	2.6%	14.3%	14.3%	68.8%	100.0
D (89)	22.9	50.6%	30.3%	11.2%	3.4%	4.5%	100.0
E (173)	41.7	24.3%	21.4%	19.7%	16.8%	17.9%	100.0
F (29)	26.9	31.0%	44.8%	13.8%	6.9%	3.4%	100.0
G (38)	55.7	0.0%	10.5%	44.7%	31.6%	13.2%	100.0
H (115)	32.2	21.7%	42.6%	22.6%	5.2%	7.8%	100.0
I (77)	43.1	6.5%	36.4%	35.1%	9.1%	13.0%	100.0
J (44)	47.3	4.5%	25.0%	47.7%	18.2%	4.5%	100.0
全体 (1017)	45.3	13.7%	25.0%	28.6%	17.2%	15.5%	100.0

表3 授業科目を選択できる自由度に対する意識（単位：%）

学校 (N)	もっと多い方が良い	もう少し多い方が良い	今の状態がちょうど良い	もう少し少ない方が良い	もっと少ない方が良い	D.K.,N.A.	全体 (%)
A (227)	14.5	32.6	51.1	0.9	0.0	0.9	100.0
B (148)	14.9	30.4	52.0	0.7	1.3	0.7	100.0
C (77)	10.4	14.3	66.2	5.2	3.9	0.0	100.0
D (89)	34.8	44.9	16.9	1.1	1.1	1.1	100.0
E (173)	16.8	21.4	58.4	1.7	1.2	0.6	100.0
F (29)	44.8	20.7	24.1	6.9	0.0	3.4	100.0
G (38)	7.9	21.1	71.1	0.0	0.0	0.0	100.0
H (115)	12.2	44.3	42.6	0.0	0.0	0.9	100.0
I (77)	15.6	46.8	37.7	0.0	0.0	0.0	100.0
J (44)	20.5	25.0	52.3	2.3	0.0	0.0	100.0
全体 (1017)	17.1	31.4	48.7	1.4	0.8	0.7	100.0

つに分類している。自由度が小さいカテゴリーから順に、0～19%、20～39%、40～59%、60～79%、80～100%としている。

次に、そのカリキュラムの自由度に対して、どのように感じているかを尋ねたところ、表3のようになった。実際の質問項目は、「前の質問で回答した

パーセンテージに対して、あなたはどのように感じていますか。あてはまる番号に1つだけ○を付けて下さい」というものである。

学生自身が選択できる割合が「もっと多い方が良い」あるいは「もう少し多い方が良い」と回答した学生は、あわせると全体の半数近く（約49%）

おり、「今の状態がちょうど良い」と回答した学生もほぼ同数（約49%）。もう少し自由度が少ない方が良いとする学生は、わずか2%であった。このことから全体としては、カリキュラムの自由度を現状より求めている学生が多いことがわかる。

機関別に見ると、カリキュラムの自由度の平均値が低かったD校（平均22.9%）やF校（平均26.9%）は、「もっと多い方が良い」と回答した割合がそれぞれ35%、45%となっており、他機関に比べて高い割合となっている。「今の状態がちょうど良い」との回答は、それぞれ17%と24%にとどまっている。逆に「今の状態がちょうど良い」と回答した学生の割合が高かったのは、C校（66.2%）とF校（71.1%）であり、この2校は、カリキュラムの自由度意識の平均値の上位2校であった。ただ、C校とF校は、「もう少し／もっと少ない方が良い」という回答がそれぞれ9.1%、6.9%あり、全体として2%ほどしか回答していないことから比較すると、他機関とは異なる特徴を見せているといえる。

カリキュラムの選択の割合に対する意識を学校別に得点化し、カリキュラムの自由度についての

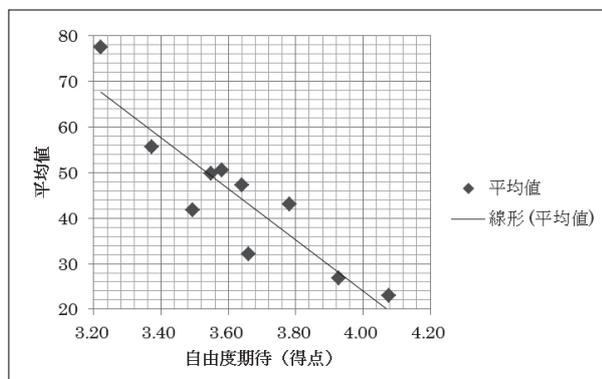


図2 学校別の平均値と自由度に対する期待（得点化したもの）の関係

表4 単位互換制度を利用しなかった理由（複数回答可，単位：%）

	a 単位互換制度を知らなかったから	b 必要性がなかったから	c 自校での勉強のほかに他校でも受講するという気持ちの余裕がなかったから	d 交通の便が悪かったから	e 自分の一週間の予定に組み込めなかったから	f その他
自由度小 (139)	38.7	35.8	31.4	11.7	19.7	6.6
自由度やや小 (254)	49.0	34.7	27.9	17.1	19.5	1.6
自由度中 (291)	41.4	38.2	28.4	15.1	9.5	1.8
自由度やや大 (175)	36.2	37.4	29.9	17.2	16.7	1.7
自由度大 (158)	26.6	37.3	31.0	17.7	14.6	3.8
全体 (1017)	39.7	36.7	29.4	15.9	15.4	2.7

平均値の値と重ね合わせると、一定の相関がみられるので参考までに相関図を掲載する（図2）。つまり、学生が科目を選択する自由度が小さいと感じている学校ほど、それに対してもっと自由度が大きい方が良いと考える学生が多くなっている。

全体として見れば、学生たちは自分の学校のカリキュラムの自由度がやや小さいと感じており、半数の学生は今の状態がちょうど良いと感じる一方、残る半数近くの学生は、もっとないしはもう少し自由度が多い方が良いと感じている。

## (2) 学生の類型化に基づく大学での学習に対する意識

(1) では機関別にデータを整理してきたが、この節では、カリキュラムの自由度に対する認識によって学生を類型化し、その他の質問項目との関連性を見て行く。

表1に整理した枠組みを用い、自由度が小さいカテゴリーから順に、「自由度小」、「自由度やや小」、「自由度中」、「自由度やや大」、「自由度大」の5つの群に分けた。全体の割合はそれぞれ、14%、25%、29%、17%、16%である。

### ▼単位互換制度を利用した割合と利用しなかった場合の理由

回答した学生のうち、単位互換制度を利用した経験のある学生は全体の1.2%で、その割合はカテゴリー間で差は見られなかった。また、利用しなかった学生にその理由を選択肢を準備して尋ねたところ、表4のような結果となった。これによれば、自由度に対する意識による違いはほとんど見られなかった。自由度が大きければ他校での授業を受講しようという余裕につながっているとは言えない。また、自由度がないため余裕がなくなっているとも一概には言えない。

表5：学生の類型別に見た、専門分野以外の学習を重視するかどうか（単位：%）

	とてもと思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない	D.K.,N.A.	計
自由度小 (139)	9.4	25.9	43.9	19.4	1.4	100.0
自由度やや小 (254)	3.9	39.0	53.1	3.9	0.0	100.0
自由度中 (291)	10.3	43.0	44.0	2.4	0.3	100.0
自由度やや大 (175)	6.9	48.0	43.4	1.7	0.0	100.0
自由度大 (158)	11.4	46.2	38.6	3.8	0.0	100.0
全体 (1017)	8.2	41.0	45.3	5.2	0.3	100.0

表6 学生の類型別に見た、他の教育機関の授業を受けたいと思ったことがあるかどうか（単位：%）

	ある	ない	D.K.,N.A.	計
自由度小 (139)	19.4	80.6	0.0	100.0
自由度やや小 (254)	11.0	87.4	1.6	100.0
自由度中 (291)	8.6	90.4	1.0	100.0
自由度やや大 (175)	11.4	87.4	1.1	100.0
自由度大 (158)	11.4	88.0	0.6	100.0
全体 (1017)	11.6	87.4	1.0	100.0

#### ▼専門分野以外の学習を重視しているか

「大学等での学びにおいて、あなたの専門分野以外の学習を重視していますか」という問いに対する回答は、表5のようになった。「自由度小」の群では「全くそう思わない」が約2割と高い。その他にはカテゴリー間の違いは見られなかった。

#### ▼他の教育機関の授業を受けたい

「他の教育機関の授業を受けたいと思ったことはありますか」という問いに対する回答は、表6のようになっている。この項目でも「自由度小」の群に特徴があり、「(思ったことが) ある」と回答した学生が約2割となっている。

#### ▼他の学校の学生との共同の活動

「他の学校の学生と共同でゼミナールをしたいと思ったことはありますか」、また「他の学校の学生と共同でサークル活動をしたいと思ったことはありますか」という2項目に関しては（回答結果は割愛）、カリキュラムの自由度に対する意識との関連性は全く見られなかった。

#### ▼ある状況が設定された場合の単位互換科目の受講意向

最後に、交通の便が良い場所で教養科目が開講されると仮定した場合に、受講したいという意向があるかどうかについて尋ねた結果をあげておきたい。表7、表8がその結果である。

表7によれば、平日の通常の授業時間帯の場合、科目が関心のあるものであれば受講したい（選択肢a）という回答が約40%、時間調整が難しいので受講は考えない（選択肢c）という回答も約40%であった。同様に通常の時間帯以外（土日など）の場合は、選択肢aが約37%なのに対し、選択肢cは約42%と上回っている。しかし、これが「各大学ではやっていないような特定のテーマを扱う科目」という条件がつくと、選択肢aは約52%、選択肢cは約30%まで下がる。

これを学生の類型別に見ると興味深い結果が得られた（表8）。3つのシチュエーションいずれにおいても、自由度が大きくなるほど、選択肢aの割合が増え、逆に選択肢cの割合が減少する傾向が見られた。すなわち、交通の便の良い場所での開講という条件付きではあるが、科目選択の自由度が大きい学生ほど、受講意向が強くなっているということである。

## 4. まとめと今後の課題

### (1) 本稿のまとめ

本稿では、高等教育機関に学ぶ学生・生徒たちがカリキュラムというものに対してどのようなイメージを持っているかを明らかにし、単位互換制度のような外部での学習に対してどのような意識を持っているかを、質問紙調査の結果から探ってきた。いくつかのデータ整理を通じて、次のようなことが明らかになった。

表7 交通の便の良い場所を設定して教養科目を開講した場合、利用したいか（複数回答可，単位：％）

	a 科目が関心のあるものであれば、受講したい	b 自分の一週間の予定表に組み込めれば受講したい	c 時間調整が難しいので受講は考えない	d その他
①平日の通常の授業の時間帯に開講した場合	40.1	30.3	39.6	2.8
②通常の授業の時間帯以外の時間帯に開講した場合	37.1	26.9	42.2	1.4
③②の時間帯に各大学ではやっていないような特定のテーマを扱う科目を開講した場合	51.7	23.3	30.4	0.5

表8：類型別に見たシチュエーションごとの受講意向（複数回答可，単位：％）位：％

シチュエーション	①平日の通常の授業の時間帯に開講した場合				②通常の授業の時間帯以外の時間帯に開講した場合				③②の時間帯に各大学ではやっていないような特定のテーマを扱う科目を開講した場合			
	a	b	c	d	a	b	c	d	a	b	c	d
自由度小 (139)	30.2	25.2	54.0	2.9	29.5	22.3	51.8	0.7	41.7	20.1	39.6	0.7
自由度やや小 (254)	37.4	28.3	44.9	1.6	36.6	25.2	44.9	2.0	45.7	22.4	37.4	1.2
自由度中 (291)	42.3	30.9	36.8	1.0	39.2	27.1	38.8	1.0	56.0	23.4	26.1	0.0
自由度やや大 (175)	39.4	37.1	34.3	1.7	37.1	32.0	40.0	2.3	54.3	26.9	26.9	0.6
自由度大 (158)	50.0	29.1	29.7	8.9	40.5	27.8	38.0	0.6	59.5	23.4	22.8	0.0
全体 (1017)	40.1	30.3	39.6	2.8	37.1	26.9	42.2	1.4	51.7	23.3	30.4	0.5

※ a 科目が関心のあるものであれば、受講したい、b 自分の一週間の予定表に組み込めれば受講したい、c 時間調整が難しいので受講は考えない、d その他

※網掛けは、aとcの値を比較した際に多い方の回答。

- ① 学生自身が授業科目を選択する際の自由度に対して、45.3％という数値から、全体的には自由度がやや小さいという印象を持っていること。
- ② 学生自身が授業科目を選択する際の自由度に対して、選択できる割合が現状より多い方が良好とする学生が約49％、今の状態がちょうどよいとする学生が約49％となっている。
- ③ 自由度に対する意識とそれに対する期待は、機関によってばらつきが大きい、強い相関がみられること。
- ④ 自由度に対する意識によって学生を類型化したところ、「自由度小」のカテゴリーの学生は、専門分野以外の学習を重視していると「全く思わない」学生の割合が多い。また、他の機関の授業を受けたいと思ったことがある割合も多い。
- ⑤ 他機関の学生と共同でゼミナールやサークル活動をするについては、自由度に対する

意識と関係が見られなかった。

- ⑥ 交通の便の良い場所での教養科目の開講というシチュエーションを設定すると、「各大学ではやっていないような特定のテーマを扱う科目」に対する受講意向は強い。また、科目選択の自由度が高いほど受講意向が強い傾向にある。

## (2) 今後の課題

単位互換制度の利用に影響を及ぼす要因として、そもそも授業科目を決める自由度が以前に比べると小さくなってきているのではないかと、という問題意識を持ち、科目を自ら選んでカリキュラムを構成しているという意識が、学習への姿勢にどのような影響を及ぼすかを検討してきた。

このことは昨今のカリキュラム構成に対する基本的な考え方、すなわち、学習成果として身に付けるべき能力と教育課程の整合性を図ることとの関連で考えなければならない問題である。学生の側に選択の自由度があることは、学習過程と高等

教育として身に付けさせたい能力との関わりを明確に示すことが難しくなる。しかし一方で、学生自身が学びたいもの、必要とするものを選択し、自らカリキュラムを組み立てていくことは、高等教育の醍醐味と言っても良いかもしれない。簡単に結論が出せる問題ではないが、各機関のカリキュラムを考える上で、一層検討が求められる課題だと言える。

また、本調査においては、「各大学でやっていないような特定のテーマを扱う教養科目」を「交通の便の良い場所」で実施することに対しては、かなり多くの学生が受講意向を示している。実際に受講行動に結びつくかどうかは別途検討しなければならないものの、科目選択の自由度があるという学生の認識が、そのような「学びの拡張」への意思に影響を及ぼしていることは指摘できるだろう。あらためて学生の学びをいかにして触発するか、研究を重ねていかなければならない。

**【付記】** 本研究は、平成25年度に大学コンソーシアムあきた学際的研究プロジェクト「参加大学間の単位互換制度の活性化方途を探る」によって行われた調査結果を元に、データを再分析したものである。

調査にご協力いただきました大学コンソーシアムあきたの構成機関、調査実施にご協力いただきました教職員の皆様にお礼申し上げます。

## 参考文献

- ベネッセ教育総合研究所「第2回大学生の学習・生活実態調査報告書」(ウェブサイトでの閲覧:  
<http://berd.benesse.jp/koutou/research/>)
- 濱中義隆(2004) 単位互換制度の現状, 吉川裕美子, 濱中義隆, 林未央, 小林雅之「学生の流動化と学士課程教育—全国大学調査にみる編入学, 単位認定, 学生交流と支援体制の実態—」(大学評価・学位授与機構研究紀要(「学位研究」18)), 41-52
- 蒋妍(2013) 大学生の授業・授業外学習観と達成動機・将来展望・意欲低下との関連—授業・授業外学習観タイプによる検討—, 京都大学大学院教育学研究科紀要, 59, 653-665
- 杉山憲司・斎藤里美, 鈴木哲郎・小林正夫(2004) 東洋大学の学生生活の質および教員の大学改革・教育改革に対する意識に関する調査研究, 東洋大学社会学部紀要 41 (2), 181-220
- 山田剛史(2013) 教員の教育力向上と学生の学習の連関に関する探索的検討, 『大学教育学会誌』 35 (1), 62-66